

内市場の開拓は思いどおりには進まなかった。

一方、海外市場における競争力は円高によって低下し、ファクシミリ事業は損失を出していた。海外生産への転換が求められたが、最大の市場であるアメリカでの現地生産は現実性が乏しく、結局、沖電気のファクシミリ海外現地生産は、1996年のオキ(UK) プリンタ工場での生産開始を待たなければならなかった。

## 5. 情報システムの高度化

### 第3次金融オンラインとOKITAC-2300シリーズ

経営体質改善計画は、「データ機器で繁栄する」という目標を掲げた。ここでいうデータ機器の中核SBUとされたのが、金融端末（金融システム）であった。1979（昭和54）年度における各SBUの売上高・利益をみると、ともに金融SBUが最大であり、PPM分析では「金のなる木」に位置づけられていた。第2次金融オンラインの営業店システムとして、OKITAC-1300およびOKITAC-1200を開発し、多くの需要を獲得していた金融端末事業は、情報処理の基盤事業としてシェアを堅持し、収益を維持することが期待されたのである。

1980年代に入って、金融オンラインの環境は大きく変化しつつあった（図6-15）。1つは、金融自由化の進展によって、証券業務の開始、市場金利連動型預金の発売、バンクカードなど、第2次オンラインの設計段階では予想もしなかった業務が登場したことで、第2は、IC技術の発展やネットワークなどにおける技術革新が、システム

図 6-15 金融機関のオンラインの変遷

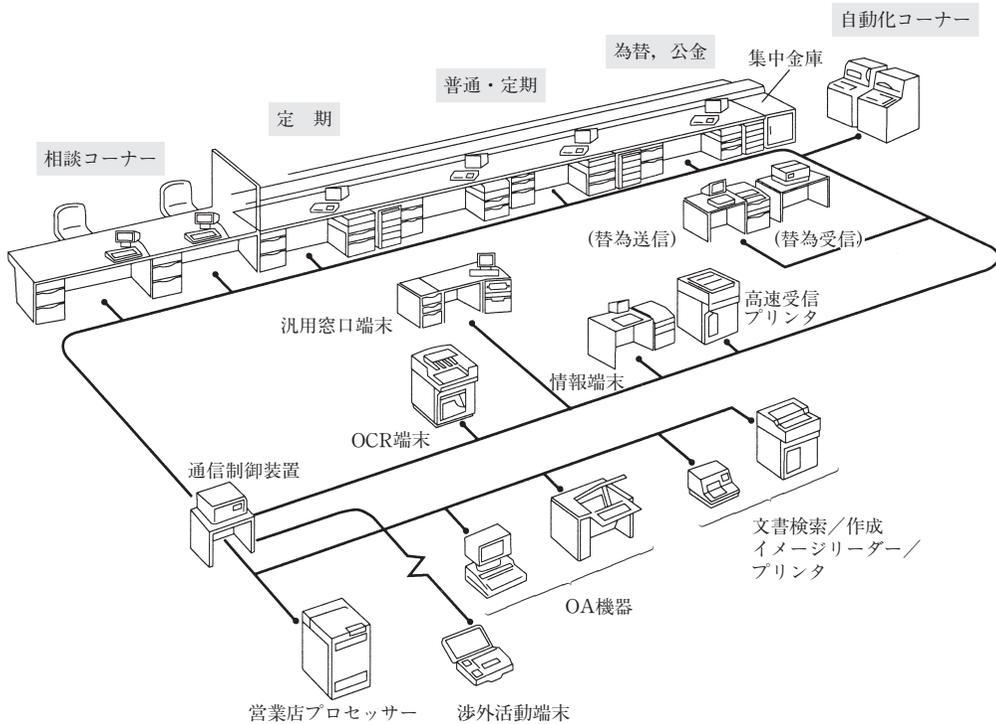


開発の制約を取り除き、新しいオンラインシステムづくりを可能にしたことである。

第 3 次オンラインシステムでは、沖電気は新営業店システムの開発に富士銀行と共同で取り組んだ。これまで銀行オンラインのシステムづくりは、基本的に金融機関側の情報処理スタッフが担当してきたのに対して、第 3 次オンラインでは、コンピュータメーカー、機器メーカー側がそれぞれのシステムづくりを実質的に担当したことが特徴であった。沖電気にとって、ハードウェアを提供するだけではなく、システム提案能力が試される時代がやってきたのである。

第 3 次オンラインにおける新営業店システムの役割は、単に勘定取引データの入出力をつかさどるだけでなく、営業店でデータ処理や情報の入出力など、従来より広範囲な領域に活躍し、OAシステムの中核として機能することであった。沖電気は新営業店システムとして、OKITAC-2300金融機関情報システムを提供したが、その特徴は、ターミナル・コントローラーの機能分散・強化、ループの採用、ネットワーク・

図 6-16 OKITAC-2300金融機関情報システム



アーキテクチャーの導入など、先端技術を大幅に取り入れたことにあった。同システムのレイアウト例は図 6-16のとおりで、システムを構成する機器の機能は、それぞれ以下のものであった。

- ①通信制御装置 (CCL) ……端末とホストコンピュータ間の通信機能を担当し、他システムとの接続が必要な機器のコントロールなど、複雑な通信制御すべてを担当する。
- ②汎用窓口端末 (GT) ……9 インチまたは14インチディスプレイ、キーボード、通帳記帳機からなり、窓口一線処理のための装置である。
- ③情報端末 (IT) ……14インチディスプレイ、キーボード、汎用通伝プリンタから構成され、顧客情報の照会に利用される。また、パソコン、ワードプロセッサとしても利用できる。
- ④営業店プロセッサ (DDP) ……営業店に配置されるミニコンピュータで、渉外



OKITAC-2300金融機関情報システム

行員の成果管理など、営業店限りの運用が適した業務、ホストシステムがダウンしたときのバックアップ機能をもつ。当初、ミニコンピュータとしてはOKITAC-50が使用された。OKITAC-50は、32ビットプロセッサで、データベース機能、ネットワーク機能、通信処理能力が強化されていた。

⑤その他……新営業店システムは、旧システムで使用中のCDなども接続可能で、通帳・証書発行機など新しい機器も加わって構成される。

OKITAC-2300金融機関情報システムは、当初は第2次オンラインのもとで、1983年9月に富士銀行本店ほか2支店で試用が開始された。その後、OKITAC-2300EX金融機関情報システムとして、機能分散型多重処理システムが追加され、営業店システムの機能強化が図られた。また、富士銀行の第3次オンラインシステムF-TOPSに対しては、88年5月から同システムの提供を開始した。

第3次オンラインの時代を迎えるにあたって、OKITAC-2300金融機関情報システムは好評をもって迎えられた。沖電気は、富士銀行の第3次オンラインシステムにおいて、先端的なシステムづくりの経験を得ることができ、これは金融端末ビジネスを進めるうえで、大きな武器になったのである。

安定した顧客を確保してきた金融システム事業であったが、バブル経済の時期になると競争が激しくなってきた。沖電気の1988年度中期経営計画は、91年度売上高1000億円の実現に向けて、「金融システム事業のシェアアップと安定成長」、「ホストメーカー攻勢に対する収益悪化の回避」、「ユーザーの課題を解決する対応力」、「金融業務ノウハウによるシステム総合力」という4つの課題を掲げた。コンピュータシステムがオープン化の方向に進むとともに、コンピュータ企業が金融端末への参入を始めてお

図 6-17 ATM開発の変遷

年	1982	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99
機種	▲ AT-100 シリーズ			▲ AT-200 シリーズ			▲ AT-300 シリーズ			▲ AT-300V シリーズ			▲ AT-400 シリーズ			▲ ATM21 シリーズ		
特徴	・紙幣ターンアラウンド			・タッチパネル ・多機能化			・ノンストップ運用 ・省スペース設置			・取引の高速化 ・GT Systemによる資金管理			・さらなる高速取引 ・汎用OSの搭載					

り、沖電気の金融システム事業は、その影響を受けて収益が低下し、およそ25%であったシェアを確保することが課題とされたのである。さらに、従来からの顧客との関係も変化してきたため、システムを開発し顧客に提示する提案型ビジネスへの転換が必要であった。

ただし、1988年度中期経営計画における「91年度に1000億円の売上高」という目標は、89～90年度に1100億円と前倒しで達成していた。これは、NTTや官公庁のほか、地方銀行、信用金庫等の金融機関が第3次オンラインのピークを迎えたことによるもので、金融システム事業をめぐる環境は、91年度中期経営計画においても、ソリューション提供戦略の再構築やコストダウンの徹底が課題として強調されるなど、依然として厳しいものが予想された。

### ATMシリーズの開発

金融機関の営業店業務の合理化に大きな役割を果たしたATMは、図6-17のような発展を遂げてきた。

1982(昭和57)年に提供されたAT-100シリーズは、世界で初めて、入金した紙幣をそのまま支払いに回せる紙幣還流機能をもった現金自動預払機、および自動振込機である。装置内に格納・滞留する現金が大幅に削減できるので、効率的な資金運用ができるようになり、またカラーディスプレイを使った振込・振替機能、封筒受付機能なども加えられた。自動振込機は、硬貨の入金、つり銭の支払い機能をもち、キャッシュカードだけでなく、現金による振込が可能になった。さらに、86年にはAT-200を開発、振込取引、ICカード、硬貨の取り扱い、通帳発行などの機能を追加し、多機能化



AT-100



AT-300 Wタイプ

が実現した。

AT-300シリーズは、1989年に提供された。金融機関の完全週休2日制の実施と自動取引装置の運用時間延長にともない、ノンストップ運用、セキュリティ強化が課題になり、このようなニーズに応じて処理能力を増強したのが、AT-300シリーズであった。

顧客の待ち時間を短縮するため、ATMの処理速度を向上するという課題に対して、1992年に開発されたAT-300Vは、カード支払いはもちろんのこと、通帳を利用した入出金取引、振替、振込、記帳取引のすべてにわたって大幅なスピードアップを実現した。たとえば、カード支払いの場合、14秒という速さで5万円の現金を引き出すことができた。なお、既存のAT-300も改造によって、処理速度のスピードアップが可能であった。

金融システムのほか、1970年代から80年代にかけては、一般民需市場から大小さまざまな各種ターミナルシステムの受注が相ついだ。そのなかで比較的規模が大きく、まとまった受注となったのは予約発券システムで、近畿日本ツーリスト、日本交通公社、日本旅行社、全日本空輸、日本エアシステムなどをはじめ、国鉄(JR)の200万人定期券発行システムにいたるまで数多くの顧客に導入され、好評を博した。

### ミニコンピュータOKITACsystem50

「ミニコンの沖」といわれるように、沖電気のOKITACsystem50シリーズは、ミニコンピュータ市場において好評であったばかりでなく、金融機関情報システムの中核プロセッサとしても利用された。これまでのOKITACsystem50の2モデルに加え、



OKITACsystem50V

1978（昭和53）年にはモデル60，モデル10を追加した。モデル60は，従来のミニコンでは不可能であった大型システムの構築を可能にし，データ通信，計測制御，事務処理，技術設計などに利用された。また，モデル10は，パーソナルコンピュータとして利用できるほか，データ通信の端末機としての利用も可能であった。システム50シリーズの各モデルは，完全な互換性をもっていた。

1982年にはOKITACsystem50Vシリーズが発売された。これは，小規模システム用のモデル15と，大規模システム用のモデル65の2機種からなっていた。OKITACsystem50Vは，32ビットMPU，分散処理システムの需要に応えることができる，本格的な日本語処理機能をもっていた。OKITAC-2300金融機関情報システムのプロセッサには，このOKITACsystem50Vが用いられた。ミニコン事業は，社内のシステムに不可欠なプロセッサを開発・提供するという重要な役割を担っていたのである。

沖電気は，1988年にスーパーミニコンOKITAC-8300シリーズを発表した。OKITAC-8300シリーズは，単一プロセッサで3.5MIPS（1 MIPSは每秒100万命令を実行する速度）の能力をもち，IBM社やDEC社のスーパーミニコンに対抗するシリーズであった。ネットワーク時代に対応するために，従来のミニコンよりも高性能なクラスへの参入がめざされたのである。

### オフコン事業とsystem 9

オフコン事業は，民需向け商品として有望視された分野である。沖電気のオフコン事業の中心は，1976（昭和51）年に発売されたOKITACsystem 9であり，79年には操作が簡単なペンタッチシリーズが追加された。また，同年にはsystem 9のニューモデ